

特集・都市における資料館②

座談会 開港資料館と市民

運営方法に望む

自分の住んでいる区や横浜を知りたがっている市民は多い。資料館を媒介にして郷土意識を培うには、単なる収集・展示だけでなく市民と密着した活動が必要である。それにはどのような資料館が望ましいのか、市民の立場から話し合ってもらった

一 期待される資料館の建設

青木(司会) 横浜市では、いま二年後の昭和五十五年開館を目標に、資料館の開設準備をすすめています。場所は、日米和親条約締結の地として歴史的に由緒がある県庁前の旧英国領事館のところを考え、目下イギリスと折衝中です。折衝次第では時期がずれるかもしれませんが、収蔵品は開港から明治の文明開化にかけての資料を中心にし、名前も仮称ですが、横浜開港資料館ではどうだろうかと考えられています。

本日は、横浜開港資料館設立準備研究委員の中村さん、花井さんのほか、市民の代表ということで、有隣堂新書ヤリ

フレット『有隣』で郷土の歴史を紹介しておられる有隣堂書店の松信さん、横浜郷土研究会のはじめからの会員である金沢中学の山本先生にご出席をお願いしました。みなさんの資料館にたいする遠慮のないご意見をうかがえれば幸甚です。

松信 「開港資料館」ということなので、開港時を中心にした資料が集められるんだと思いますけど、定期的にはどこまで入るんですか。

中村 震災までです。オールドヨコハマが終るのが震災なんです。ですからそこまでの資料が開港資料館に入れられるわけです。

花井 最近、よく聞くんですよ。資料館を早く造ってほしいという市民の声を。

ですから、市が資料館を造る準備をしていくということ、市民の期待は相当大きいと思いますよ。

青木 それは一般市民ですか。

花井 はい、普通の一般市民です。今までなかったのがおかしいんですよ。

松信 開港時の資料だけでなく、今つくっている公文書のうち、完結したものも長期的な視野で今から整備していかないと、後で間に合わなくなりますね。ま、とにかく、開港資料館としては、場所もふさわしい所です。

花井 これが資料館のはしりみたいなもので、これから先、二次、三次とつぎつぎに造られるんだろうけど、いい計画ですよ。

中村紀一(千葉大学助教授)
花井清二良(神奈川新聞社副主筆)
松信泰輔(有隣堂書店社長)
山本健次郎(金沢中学校長)
司会 青木虹二(企画調整局副主幹)

青木 なにも役所的に一次、二次と分けたのではなくて、場所が場所ですから、あそこに十階建のビルを建てるわけにはいかないんです。ですから、開港期と明治・大正期の資料は旧英国領事館跡の「開港資料館」に収蔵し、昭和になつてからの資料と現在の公文書は、別個のものをもたえ、という構想のようですね。

松信 市史編集室・図書館・県立博物館などでも資料を持っているでしょう。その辺の重複をどうするかという問題がありますね。重複を避け、あれはあちらにあります。重複を避け、あれはあちらに

花井 資料館ができるからといって、それぞれ集めているものを、こち

によこせというわけにはいかないでしょうから、どこにどんな資料があるのかを把握しておく必要がありますね。

青木 時代的に限られていますので、開港関係の資料としては、他のところで持っているというのと、開港資料館だけで十分研究でき、論文を書けるぐらいの資料を置いておくと、そういう考えでいるようです。

松信 資料にもいろいろ種類があるでしょう。たとえば、風俗的な資料もあれば、経済的な資料もあるし、政治的な資料も……。

青木 一般市民にアピールするのは、風俗的な資料になりますね。ただ収集のポイントとしては、それだけでは不十分なので、政府の公文書とか外国の公文書の写しなども集めることになるでしょうね。

山本 開港資料館というのは県立博物館とは性格が違いますか。たとえば模型を展示するとかして、生徒の社会科見学の役に立つようなものになるのか、それとも文書中心の研究者のための構想なのか知りたいですね。

青木 あくまでも文書資料を中心とした資料館ではあるけれども、単に研究者のためのものではなく、一般市民の方々が、横浜の成り立ちを知るための展示も十分考えていくという構想ですね。

花井 展示品的なものも当初から計画に入っていますよ。カビくさい古文書だけというのではなく、資料というものをもっと幅広く考えた方がいい。性格として、開港を中心に横浜の生成に関する市民の関心や勉強に答えていくということなので、模型や現物など目玉になるものがないとおもしろくないでしょう。

松信 明治三十年代の横浜商家の図を画いた本を、アメリカから県立博物館が手に入れたんですが、その当時のありさまがこの本に綿密に画かれているんです。この本によると、本町通り、弁天通りの町並みというのは、川越あたりよりはるかに絢爛豪華だったようです。これを模型にして再現してみせたらいかげすか。ただ、横浜商人というのは、栄枯盛衰が激しいから、どの時点でおさえるか、むずかしいですね。

中村 資料館のイメージとして、研究委員会でも議論しているのは、展示機能と図書館の機能と文書管理機能、この三つのバランスをどうするかということなんです。この場所で和親条約の調印が行われたんだということを知るだけでもいいですけど、そこからさらに、市の歴史を知りたい時には、学芸員がいて説明が受けられる、勉強ができるという方に、どちらかといえば力点が置かれているような気がします。



明治期の商館

二 資料収集のポイント

中村 資料収集に関しては、収集のポイントを明確にしないと、開港資料館としての意味がなくなってしまう、単なる文書館になってしまうですね。しかし、個性ある資料館をつくるため、あんまり開港だけに絞ってしまわないで、その当時の地方文書は開港に関係ないから入れなくていいということになり、ポイントを明確にしても漏れるものは漏れていってしまっているんですね。そこをどうするかが問題だと思います。

松信 当時の資料として欠落しているのは、経済史的な資料でしょう。横浜ドック

ク（現三菱重工）なんてのは横浜の重工業の原点なんだし、あそこを調査すれば港と関連して何か出てくる気がしますね。

花井 確かに今ご指摘のように、横浜の生成の大きな柱である経済史的な側面が着想の中にないわけで、この経済史的な資料を自分で集めなきゃいかんでしょう。それと、横浜が他の都市と著しく違うのは、国際性を持っていったということですよ。国際的な広がりを持った資料ということになると、山国の都市がまねようと思ってもできない独自のものなんですから。

青木 その当時の経済史といった場合、

やはり重要なのは、二大輸出品である生糸と茶の資料ですね。生糸・茶箱のレッテルなどは一応市史編集室が持っています。が、この生糸によって、養蚕・製糸業地帯の上州・甲州・信州と横浜とが実はずながるわけなんです。東日本の山間部で生産された生糸は横浜から輸出されたんで、横浜が結節点なんです。

松信 資料収集に関連してといいますと、へボンの手紙だつて最近ポコッと出てきた資料ですよ。外人側からみた横浜の資料というものが、案外、外国にあるんじゃないですか。本国に帰った外人は震災や戦災にあつてませんからね。

青木 その頃の資料を集めようとするとき横浜には少ないですね。日本の中でも震災・戦災に会わなかった人たちが持っていることが多いです。それから外国です。これはまだかなりあると思います。このチャンネルをうまくつけられるようにしておかないとなかなか集まらないですね。これは文書課の担当者から聞いたんですが、最近、横浜絵とか資料をたくさん持っている外人の方とお会いしたところが、この人は横浜が好きで二代続いて横浜研究をしていて、私たちがより横浜をよく知っているんですね。同じ趣味をもった人がアメリカの中でも広がり、つながっているだろうし、大切にし

たいチャンネルだと思えますね。

松信 海外をさがせばかなりあるんじゃないですか。そういう資料が消えてくならないうちに、ちゃんとした所で保存しておかなければならぬでしょうね。

中村 私の父は住吉町に住んでいて、そこから横浜小学校に通っていたんですけど、その当時の学校への行き帰りのことなんか、うれしそうに話すんです。そのとき聞いたんですが、県立博物館は横浜正金銀行を正確に復元したというけど、父が昔遊んだときの建物と違うというんです。玄関前の石の置き方が完全に復元されていないというんです。いまのは、写真を見て復元したのだから、父の記憶違いかもしれないし、それも証明はできませんけれど。

松信 中村先生のお父さんは関内でご商売なさっていたんですけど、この関内の商人というのは人力車で通っていた人たちなんです。それで関外の商人に比べて裕福だし、文化レベルが高いんですよ。中村先生のお父さんなんか話を聞くとおもしろいですよ。この関内からは、大仏次郎先生とか佐藤美子さんね、それから矢代幸雄さん、吉川逸雄さんとかいった一流の文化人が多く出ているんです。みんな税関吏とか貿易商の子弟なんです。大仏次郎さんから、兄の野尻抱影氏の話、今のうちにテープレコー

ダーでとっておけよといわれていたんですが、そのうち次々と亡くなられてしまつてね、ですから文化人に関する資料として、聞き取りを集めておく必要がありますね。

青木 関内といえ、松信さんは横浜小学校のご出身でしょう。あれは横浜でいちばんの小学校でしたよね。

松信 私のところは、九人の兄弟全部そうです。

山本 いま横浜小学校はありませんね。

吉田小学校も同じですが、両方とも本町小学校へ合併されました。

青木 鉄筋校舎だったから空襲でも残ったのどうですか。

松信 あの辺一帯が米軍のキャンプになって、住民がいなくなったためですよ。

山本 校舎はいまでも港高校として使用しています。

松信 横浜大空襲のとき、残ったのは鉄筋の小学校だけだったですね。やっぱり有吉さんはえらい市長さんでしたね。

山本 震災後の市内の小学校は、借款で鉄筋づくりにしたのですが、階段でなくスロープでした。これは災害のとき、すぐ逃げさせるのと、それから建物の強度を考えて造ったのだそうです。戸塚小学校などは木造ですが、一階だけなんです。ドアも工夫してあつて、震災の経験をかきましたので、全国からずいぶん

見学にきたそうです。

青木 空襲のときに、西前小学校は藤棚の住民の方の努力で助かったという話をききましたが……。

山本 共進中学の建物も住民が守ったんですよ。

青木 小学生のころ、松信さんは山下公園のところで泳がれたのですか。

松信 いや、もう本牧の方でした。山下公園ではY校の生徒がボートレースをやっていました。震災後ですが、吉田橋



生糸の出荷風景

のところにカキ船がでていて、船の上で料理をたべたものです。

中村 川はよごれていなかったのですか。

松信 あのころはまだきれいでしたよ。

谷戸橋のたもとでは釣がさかんで、ワタリ蟹とかシヤコがよくとれました。

青木 ハマッ子はシヤコを煮て平気でたべていましたね。

山本 シヤコは夕河岸でいくらでもでていましたよ。

松信 シヤコといえば、いまでも築地のスシ屋へいくシヤコは子安で皮をむいているんですね。尻尾をこわさないできれいにむく技術が子安にのこっているんです。家内工業でやっているんですよ。

青木 ものがとれなくなっても、ノウハウがのこっているんですね。

山本 金沢区小柴の斉田さんの話では、昨年あたりは東京湾の水がきれいになったせいとか、シヤコがまたとれるようになったといえますね。金沢文庫のスズラン通りでは毎晩皮をむいたシヤコを売っていますよ。

中村 むかしはシヤコは安かったんですか。

松信 束にして売っていたものなんです。

山本 なつかしいですね。子供の頃はハサミで切ってたべたものです。

松信 シヤコのおつゆでオカラをつくと、あれがまたおいしいんですよ。

青木 むかしのザキは学生が多かったけれど、いまはみんなはなれてしまいましたね。

松信 阪東橋や野毛には古本屋もたくさんあったし、Y校の生徒なんか、学校のかえりに吉田橋までずうっと歩いてきたものですが、あのころはいろいろと途中退屈しなかったんですね。

中村 Y校といえば、戦後ですが、中華街では、台の上におまんじゅうがおいであって、食べた分だけお金を払うシステムだったんです。そうすると、Y校の生徒は中だけほじくって形をちゃんと残して、お金を払わないなんていたずらをしたものですよ。

松信 Y校の連中はワルイのが多いんだなあ。私もOBだけど、あの学校はむかし七年制だった関係で、生徒はませていたんですね。

中村 今日はどうも、私より父が出ていた方がよかったですね。私など千葉へ職場が変れば、千葉へ引っ越すのがなんでもないけれど、父は死ぬまで横浜をはなれないといっています。この間、古稀をむかえた記念に冊子をつくりました

が、横浜にはふかい愛着をもっていていますね。

松信 外人の方もそうですね。若き日の

思い出というか、本国へ帰られても、むかしの写真とか絵を大切に保存しておられますので、そうした貴重な資料もなんとか集められればと思いますね。

青木 実はいま東京在住の外国人の方が綿絵をたくさん持っておられるのですが、横浜への愛着で自然に集ったのだといっておられますね。そうした資料を開港資料館で譲りうけたらと思っても、お金だけでは解決できませんね。行政の側が「お金を出すから」といったって、

「お金のために集めたんではありませぬ」といわれますよ。ですから、市民が横浜を知るのにどうしてもこの資料が必要なんだという、市民のバックアップがあつて、はじめて理解してもらえるものだと思いますね。

三——市民は横浜を知りたがっている

山本 今の構想からいうと、資料館は市民のためにもみせるし、研究者のためにも公開するしということなんです。あの領事館跡は理想的なものを求めるとあまりにも狭いと思いますよ。

中村 ですから、資料収集のポイントを明確にしないと、入りきらなくなってしまうんです。

松信 たとえば、あの建物に手を入れる

ということとはできるんですか。

花井 それはだめです。建物の保存が英国の条件みたいですね。建物自体は別に中緒あるというものでもないんですが、場所そのものが資料的な性格のものなんです。条約の締結の場所ですから。

山本 だから市民にとってあの場所にできるというのは、大変すばらしいことなんです。港に行ったときに立ち寄ることもできるし。しかし、展示はあの領事館でもかまわないでしょうが、収蔵はやはり相当広い敷地を別に用意する必要がありますね。しかし、ただ展示してあるのみで、ボタンを押すと毎回同じ説明がスピーカーから流れてくるというふうなものではなくて、学芸員がいて、その都度、年齢に応じて子供たちにもわかるように説明してくれるというのが望ましいですね。それから動く人形なんかを使って、ドラマチックにみせる設備だとかを備えていただければありがたいですね。

松信 海洋博物館もシルク博物館も経営的にものすごく苦しいわけですよ。お客さんの利用度が少ないとか、経営維持が難しいとか、そういう問題がこりまです。山本先生がおっしゃったあたりのところをポイントにしていく必要がありますね。

花井 出版活動なども研究活動と合わせ

て当然やっつけていかなければならんものだろうと思いますよ。

中村 さっきいった展示と図書収集と文書管理の三つの機能のうち、どの辺に重点を置かかというのを僕たち市民の立場から考えていってもいいんじゃないかと思うんです。いまのところ、山本先生がおっしゃったようなこともやりたいという意見もたくさん出ているんですけど、あの狭い場所では資料を保管していくスペースがなくなってしまうすよね。うしろに何階かの建物を建てて、保管庫にするということも考えられるんですが、それにしても資料を入れるというのは限られてしまう。とにかく散逸する資料を、こらできちっとまとめておくことが必要ですね。

花井 やはり、最初はとにかく資料の収集・保存ということで急がねばならんでしょう。しかし単に持っているだけじゃ、あるいは特別な研究者だけのタマリ場というのでは意味がないと思います。市民の立ち場からいえば、従来の資料館、歴史館にはない横浜の開港資料館としての特別な運営の仕方、機能のあり方があったっていいんですね。いや、むしろ、そうでないと思いませんか。

松信 現在の状況からみて、市民と港と係りあっている部分が、経済的にも地理的にも稀薄になってきていると思うんで

すが、港というものが市民生活とどう係って発展してきたのかということ、新市民は知らないだろうし、旧市民は忘れていて思うんです。自分たち市民の生活に直接関係あるというところを、研究者のためだけの資料館ではなくなり、市民全体が関心を持ってくださると思うんです。そう考えると、開港資料館が新しい役割を担って登場するわけなんです。いままでの博物館や図書館にはなかったものを、野心的に狙っていく必要があるという気がします。ベッドタウンの新市民も東京へ向いているわけだけど、みんな新しく住んだこの横浜を知りたがっているわけですよ。神奈川の郷土史関係の本がよく売れているのも、それだけ知りたがっている意識のあらわれだと思えますよ。それを行政側がうまく受け止めてあげなくっちゃ。

山本 そうですね。私が青葉台中学の校長をしていた頃の話なんですけど、PTAの父母たちは東京版の新聞を読んでいるんですね。しかし、緑区を知りたい、横浜のみななどを知りたいといってくるわけなんです。横浜見学というのをPTAの行事でやっていたのですが、こういう開港資料館があれば、横浜の成り立ちをみせることもできるし、資料館の建設は意義のある計画だと思います。私は市民のために子供や父母を中心に申し上げてい

ますが、松信さんがおっしゃったように、横浜に住みついて横浜を知りたいという意欲が強いんですね。

青木 区誌は、区の職員の皆さんが売りさばきに一生懸命だったせいもあるけれど、一万冊ぐらい出たんですってね。

山本 「神奈川区誌」の場合、一万六千冊出しました。

松信 よく売れましたね。中央の出版社でも初版は三千ぐらいしか出さないうからねえ。

山本 それだけ区民の関心が高いということでしょうね。

松信 山本先生、朝日カルチャーセンターの歴史講座の需要はものすごいんですね。横浜ではそういう自分の時間を使いたいと思っている奥さん方は一体どこへ行っているんでしょうか。

山本 PTAの奥さん方では鎌倉見学が多いですね。

青木 資料館ができることを媒介にして、郷土意識を培うような動きを、そういった人たちの中で広げていくことができればいいんですね。

山本 金沢の大道小学校のPTAの父母が、自分たちの一つの学習として「武州金沢のむかし昔」という民話的なものをまとめたのですが、その人たちがこんな生きがいを感じたことはなかったということです。開港資料館でそういう人たちが

集めて組織づくりをして、テーマを持ってやっつけていけば、意欲的なものができてくるんじゃないですか。

青木 そうですね。資料の保存・展示という座って待っているだけの業務の他に、そのような業務も取り入れていけばいいものができるでしょうね。

四——十分な予算と適する人を

松信 「横浜市史」を作るために集めた資料は膨大なんですよ。

青木 資料収集費はつくりはじめる前にはたくさん付いていたので、かなり資料が集まったんですが、はじめたとたん収集費が印刷費に振りかわったため、収集が止まってしまったんです。しかし資料の所在は揃っていますけどね。

花井 収集に関してもそうですけど、先々の運営といえますか、資料館活動に相お金をかけてみるという姿勢がないとだめですね。私たちがみた他の資料館は、ほんのはした金、年間何十万円とかいうことで〇〇館と名乗っているものもあります。

松信 あそこは金をたくさん持っているぞということになると、買ってくれると思うから、古本屋さんが出てくるんですよ。予算がないと持っていけないんだろ。

花井 市民の立場からみた資料館のあり方というものを、市側がちゃんと理解してくれば、税金を使うということも理解できるわけなんです。他都市の資料館をみてきたところで、年間の予算が十萬単位、収集の予算は一文もなし、寄贈を待つのみというところもあります。

青木 資料館というのは出発前には予算が付くもんなんですが、できてしまうと、どうも。

松信 けちるんですかね。

青木 いや、けちるんではなくて、これで十分だというんですよ。世田谷区にある資料館の場合、たまたま彦根代官の大家家文書を一括して寄託を受けたので、それを保存するために資料館ができたんですが、目玉があればあとはいいだろーということ、予算が少なくても、その保存だけということになりかねませんね。それではいけませんので、閉館してからも資料を集めていく必要がありますから、それなりの予算を付けていかないと関古鳥が鳴くようになってしまいますね。

花井 地方のいろいろな資料館で、相当の専門家が県民のためにやっていたりしている姿勢を最近私はみてまいりましたけど、ともかく金がないから身動きできないんですよ。気の毒になりますね。それを考えておかないと、造ったけどお

手上げというんじゃないんで、やっぱり重要な文化の仕事として、さすが横浜といわれるような資料館にしてほしいですね。

青木 資料館をせっかく造っても、利用者がさっぱりだというのは困るので、そうさせないためにも、山本先生がいわれたような工夫が必要ですね。新しい運営方法が組み込まれないと、結局、利用者数が少ないという行政的な視野だけで予算がつけられてしまうんですよ。

山本 博物館の入場者が少なくても、新聞で叩かれたりしたことがありましたけど、何人きたかで考えられるとひどく淋しいんですよ、その仕事に携わっている人にとっては。

花井 藤沢市文書館の方が話してくれましてね、行政は来館者が何人あったかということ、測定したがるけれど、一人の研究者、あるいは学校の先生がおいでになって、その資料を使って教育をすれば、百人、二百人の来館者と同じなんだと。

山本 何人だったと評価されたんでは、運営に携っている人の意欲を欠きますよね。

花井 それから、市民の利用とか関心に答えていくという積極的な姿勢を、行政が持たないためですね。

青木 他が造っているから、横浜でも造

るといって沈滞したものになってしまふ。せっかく造るのだから、それなりの人を配置してほしいし、また市民の側からそういう要望が出されてくるようであってほしいと思いますね。

松信 資料館とか音楽堂のような文化施設では、とかく一般の行政の人が館長として交替でいらして、ちょっと座って出ていくという傾向があるんじゃないですか、どこでも。

花井 図書館なんかもそうですね。昨日まで税務をやっていた人が、突然、館長になるわけでしょう。そんな図書館行政なんてありますか。県立図書館の館長は司書の資格を取るために、図書館学の講義を聞いたたりして、一生懸命に努力したそうです。そういうやる気のある人ならいいんですよ。資料館なども市長部局にあるということだと、非常に弾力性を欠くというか、非専門的な人事や機構になりやすいわけですね。これは、やはり、行政の枠からはみ出して考えなければいけませんね。

松信 図書館の話が出たからいいですよと、横浜の美術館や図書館など文化的施設が貧弱なのは世界の大都市でもめづらしいですね。横浜の文化レベルが下がったのは、一つには市民と港が離れてしまったということがありますね。横浜の文化を支えていたのは港だったわけ。それが

離れてきたことによつて単なる商店街になってしまったんです。それから、行政側の問題として、あらゆる要求に答えようとするから、多目的なうすっぺらなものになってしまふんですよ。八方美人のに皆のいうことを聞くから、青少年図書館みたいなわけの分らんものはいくつもできちゃうんだ。住民の表面の意向を取り入れるのはいいんだけど、何がいちばん大事な要素かという観点が欠けているんですね。

中村 けれども市の施設についていえば、まず第一段階として、入りやすさというものがないと市民は近づきにくいわけですよ。ですから、そういう意味で青少年図書館をたくさん造るということ、本に接近するということが、図書館が身近になるということとして、意味のあることでしょう。やはり、資料館の第一段階として、まず入りやすさというものがなければならぬんですから、展示機能に重点を置くのは重要なことだと思います。たとえば新潟市の郷土資料館は庭園風になっていて、アプローチもしやすくなっているんです。それにたいして、福島の歴史資料館は文化センターの一面にあつて、非専門家が気軽に入れる雰囲気はないですね。ですから展示には重きが置かれていないんです。新潟の場合ですと、展示の方に重きが置かれすぎてい

て、研究活動とか百年後に残していくよ
うな資料保存ということにあまり力を入
れていないようです。まず最初に入りや
すきがないと市民は近づいてこないし、
その次に利用のしやすさがなければなら
ないわけなので、その辺の調和がむずか
しい問題でしょうね。

青木 親しみやすいということは大事な
ことなんです。中味のレベルが高くな
いといけないし、この二つの問題の調和
がむずかしいですよ。最近できた横浜の
磯子図書館なんか市民の利用度が高い
ん高いんですが、中にどんな本が入っ
ているか考えるとね。こどもの本はすば
らしいのですが、大人の方は小説ばっか
りでしょう。利用度が高いからといっ
て、いい図書館といえるのかどうか。

花井 青少年図書館なんて図書館じゃあ
りませんよ。あれを図書館と称し、図書
館に対する市民の要望に答えているんだ
という姿勢を取るから不愉快なんだ。予
算がないからとりあえずこういうものを
造りますよと一言いえばいいんですよ。

山本 学校では青少年図書館についてそ
ういうことはいわれないうね。教育関
係では、あれは生徒の不良防止のため

に活用するんだと、図書館じゃないんだ
とはっきりしていますよ。

松信 予算がないからというのをごまか
してきたから、横浜市の文化施設は世界
最低になったわけで、予算というのは価
値観の配分なんですよ。やる気が予算を
つけさせるんです。資料館にも維持費・
収集費など予算がたぐさつくかどうかど
うか、やる気しだいですよ。

五——準備段階から市民と

密着した活動を

中村 さっきいった第一段階としての入
りやすさ、第二段階としての利用のしや
すさ、さらに第三段階として収集のポイ
ントを明確にするということがあります
ね。寄贈も全部受け入れるとなると、雑
多なものまでがゴチャゴチャになって整
理の仕様がでない。収集のポイントを明確
にして、量より質を大切にしなければい
けないと思います。この段階では青少年
図書館みたいなものをいくら造ってもだ
めなんです。質的に高いものを維持して
いくというのは、市民とどうやって濃厚
な関係を結べるかにかかっていると思

ます。たとえば、横浜絵の絵はがきを売
るとか、資料館の研究成果を市民に帰し
ていくとか、もっと進んで開港資料館の
資料を使って横浜文庫みたいなものを出
版していくかが考えられますね。

青木 資料館ができて、ただ資料を収
蔵しているだけではなく、市民と密着し
た運営方法を考えなければならぬとい
うことですね。

山本 会報を出すとか。

松信 月刊でも季刊でもいいから、そこ
に居る学芸員の研究論文なんか発表した
りしてね。

山本 私の希望としては、市民の郷土史
研究会などに、夜でも開放できるように
設備がほしいと思うんです。そういうグ
ループ学習を育てていけば、そこには常
時、何人かの人が集まってきて、横の広
がりが出てきてきますよ。そうすれば、
資料館としても情報を得られやすくなり
ますし。たとえば資料の所在に関する情
報を市民から得られるとか。

花井 ねむっている資料、秘蔵資料を発
掘することの可能性に期待できるわけ
だ。

青木 そうですね。しかし、資料館がで

きたからといって、急に市民とのおつき
合いなんて、これは無理だと思うんです
よ。そこで、大仏次郎記念館ができるま
で関係資料を教育文化センターの一室で
保管していたんですが、そこが今度あき
ましたので、そこをとりあえずの資料収
蔵場所兼サロンとして、準備段階から市
民と接触を深めていく、ということも必
要だと思えますね。

資料館を市民の施設にするためには、
できるだけ多くの市民が関心を持ち、パ
ックアップする中で、資料館を造っていく
ということでしょうね。いま、市ですす
めている旧英国領事館の利用に関する英
国との交渉でも、単にこういう計画があ
り、ここを資料館にしたいからといって
交渉するよりも、横浜市民の強い要望だ
というバックアップがあつてはじめて交
渉もうまくすすむと考えられますね。官
製の「はい、つくりましたよ」式にさせ
ないためには、市民のバックアップが重
要だということを再度強調して、今日の
座談会を終りたいと思います。どうもあ
りがとうございました。